

牧師室から (2022.6.5)

前回に続き眠りの話である。以前名古屋でお世話になったことのある牧師の父上が旧約学者で、新共同訳聖書の翻訳の重責も担っておられた。時折息子の牧会する教会に来て、信徒に向かって話しをされていたが、とても面白く好評であった。わたしもたまたまその教会に出席していたので、一度それを聴く機会があった。確かに面白かった。30年も経っているのに、いまだによく憶えている。

その際、翻訳作業におけるいくつかの聖書箇所についての諸問題、経緯を楽しく、ユーモラスに語ってくださった。その中の一つが、「ここで、わたしは目覚めて、見回した。それはわたしにとって、楽しい眠りであった。(エレミヤ書 31 章 26 節)」という箇所だが、その先生の考えでは、この句は、後から付け加えられたものであろうということであった。というのは、まだ印刷技術のない時代に、聖書を書き写していた者が、あまりにも作業が長く続くので途中で眠くなって居眠りをしてしまった結果、ふと目覚めた時にその自分の様子を本文に書き加えたのであろうということであった。

ただ最後に言われたことは、聖書の翻訳については共同作業なので、自身がこう考えていても、必ずしもそれが通るわけではないということであった。そのようなことから、聖書の個人訳を調べてみるのも、面白いと思った。

聖書協会共同訳がこの世に出てからすでに4年程経った。近々、翻訳に携われた方の講演が近隣教会で開かれるというので、ぜひ聴いてみたいと思っている。

(鈴木淳一牧師)